

あとがき

「奇跡だって言うんだから、奇跡のままでもいいじゃないっ」

そんな誘惑の声が、いつも頭の中にあつた。放映は、ちょうど兄夫婦の手伝いで母を見ていたときだった。痰をとるべく、気管切開された喉にバキュームを入れているときだった。「何なんだあ、これは」と。

本書は、何よりもインターネットで知った多くの方々の協力がなければできなかった。「Yahoo!掲示板」や、好評・悪評みだれ飛ぶ「2ちゃんねる掲示板」(NHK版)を通じて、さまざまな意見交換がされた。多くの若者・中年(らしき)だけでなく、現役テレビマンも、重度障害児者のおられる家族も、各分野の専門家も、そして障害をもつ人自身の投稿もあり、いろいろな話ができた。さらには、外国文献を翻訳するチームもでき、文献探索をかって出た人は国会図書館で調べるまでした。本書は、そんな協力の上でこそできた本だった。私の日記 <http://www2.diary.ne.jp/user/140664/> や、お世話になったジャーナリスト有田芳生さんの日記 <http://www.web-aria.com/> また石井さんの週刊誌の記事によって、専門家の意見、文献、経験、

ご家族の心情など、次つぎと来た。同時代社の川上徹さんは、緊急に出版が必要だと決断された。ここに、協力していただけた総ての方々に、深く御礼申し上げます。

なお、児玉和夫先生の寄稿は一見すると編著者と意見を異にする部分があるが、基本的には同様の見解であると読めるものであり、かつ愛情あふれるものであった。有田さんの寄稿は、今回の問題の根深さと背景を指摘している。本書は短い間で、できる限り取材をし、資料を収集し、検討議論してできたものだったが、間違いもあるかも知れない。どうぞご感想、ご意見ともどもご指摘いただきたい。

NHKは、予定していた米国への放送も中止し、担当者の釈明放送のみで良しとし、再放送もしないという。じつは、放送に耐えられない番組だったと認めているのである。いくつかの週刊誌、そして、「京都新聞」、「毎日新聞」から始まり、次つぎとマスメディアから疑問の声が上がった。新聞社は、当日の番組欄に推薦文を掲載し、また本を広告したことのアリバイ証明かもしれないが、「偽りだ」という認識は、確実に広がりつつある。そして、NHKが放送法の多くの規定に違反し、講談社や大和出版が詐欺商法をしていることも、知られつつある。

それでも、海老沢勝二会長までもが、説明不足の番組だったという以外の問題はないとし、未だ正当性を主張している。検証のために上映会を開こうとする方たちに対しては、なんと警告書

を出すありさまでもある。

今、講談社の本も、大和出版の本も、ナチュラリスピリットの本も、「NHKで大きな反響」などと宣伝され、増刷が続いている。私は、被害者が出ない事案ならばたぶん何も言わなかったろう。偽りの書籍を買っても、一人ひとりの被害額はとうとうものでもない。NHKや講談社などの信頼性が失われるだけである。昨年来の外務省と同じく日本の恥であり、外国メディアからも軽んじられるが、それでも何も言わないだろう。

でも、現実には、これによってドーマン法に挑戦するご家族が増えようし、挑戦すれば障害ある本人は痛い思いをする。第二、第三の流奈君も出よう。人間能力開発研究所では「奇跡の○○」が花盛りである。そして、藁をもつかむ気持ちをもちながらも子どもの障害を受容してきたご家族の心が傷む。障害者をもつご家族が、どうしてドーマン法をしないのか、と聞かれる事態は既に起こっている。流奈君も、家族も、将来の逃げ場を失う。

奇跡のままでもいいというわけには、やはりいかなかった。「事実を見る目」、「見つめつづける気力と勇氣」が必要なのだと思う。マスメディアが裸の王様となったときは「裸の王様だ」と言わないといけない。

だから、早くこの問題を終息させるべく、この本を作った。じつは、将来のことを考えてR君と匿名にしたかったが、ここまで出ているときもはやできない相談だった。NHKはどうか早く

検証の番組を作って謝罪し、講談社らは各書籍を絶版にして欲しい。

この五月、神奈川県内の重度知的障害者施設で一泊二日の介護実習をした。横浜弁護士会の場合、司法修習の一環として弁護修習の中で実施している。施設には迷惑かもしれない。私は三人の修習生と共に参加した。本来、弁護士は泊まるまでの付き合いはしないが、せつかくの機会だからと参加。感動し、いろいろ考え、疲れもした。重度といっても、その中でもいろんな方がいる。二人として同じ状態の人はいない。そして職員は、その一人ひとりに対応されている。文字どおり頭が下がる。そして何より感じたのは、接することが大切だなあ、と。私、初めての障害類型の方とも会った。率直、最初怖かった。でも、接していけば、ああ、人間っているんな人がいるんだなあ、生きていて欲しいなあ、と。五年前も一〇年前も同じ、そして多分五年後も同じ（今ごろ消灯の時間かなあ、寝たかなあと気になる）。受容することの大切さを、思った。

藁をもつかむ気持ちの家族につけ込んだ番組「奇跡の詩人」と本、その思慮の浅さと、視聴率、営業至上主義には反吐（へど）がでる。

昨年五月末、五歳直前の四男を交通事故で亡くしてしまった。重度の自閉症かつ知恵遅れ。道

路の怖さも信号の意味もまだ分っていないなかった。でも少しずつは成長しウンチをトイレですることとをようやく覚えたところだった。多動症も激しく、家族は鍵、チェーンや扉まで増設改造しつづけたが、戸外に出るための知恵はひどく進歩し何度目の大冒険か、探している少しの間に自動車にはねられしまい、そのまま死んでしまった。一度でいいから「とーたん」という言葉を聞きたかった。文字盤でいいから聞きたかった。いま、映画「千と千尋」の主題歌の「繰り返す過ちのそのたび、人は、ただ青い空の青さを知る」などのフレーズがやたら好きです。

流奈君が、いつの日か「ママ」「大好き」と言うことを祈る。あの文字盤（FC）でもいいから、ゆっくりゆっくりでいいから、真実自分の指差して言うことを祈る。

滝本 太郎

弁護士